

glandular striate, margin hyaline, subentire or crenulate-undulate; stamens 5, opposite to the corolla lobes and attached at base of corolla tube; filaments very short, 0.25 mm long, glabrous; anthers oblong, distinctly bilobed, 0.5 mm long, dorsifixed. Ovary semi-inferior, globose, free, upper part glabrous. Style robust, 0.25 mm long, glabrous; stigma inconspicuously lobed. Fruit not seen.

Fls.: January.

Type. On the way from Laa to Muri, Upper Subansiri, Arunachal Pradesh, 900 m, 10.1. 1987, S.K. Das 3086A (Holotype in CAL). Isotypes. S.K. Das 3086B (CAL); S.K. Das 3086C and 3086D (AFS).

The new species is closely allied to *Maesa rugosa* C.B. Clarke, but can be easily distinguished by large, oblong, entire leaves with inequilateral base, reticulations not prominent; inflorescence laxly branched, much longer than petioles, densely flowered; corolla tube less than 1/4 length of corolla lobes.

\* \* \* \*

アルナチャル プラデシュ (アッサム) から *Maesa rugosa* 近似の新種を報告した。葉が長大全縁で基部が不相称, 花筒が短く花序が密などの点で区別できる。

---

□上野益三博士, その日本自然誌史研究 Dr. Masuzo Ueno (1900-1989) and his studies in history of Japanese natural history. 上野益三博士は平成元年6月17日午前8時10分, 心不全のため89歳の高齢で不帰の客となった。私たちは日本博物学史の最大の研究者を失ったのである。葬儀, 告別式は19日に瑞輪寺で行われた。博士は明治33年2月26日大阪市の上町に生れた。彼の父は住宅から川一つへだてた道修町の薬種問屋に勤めていた。そしてアサガオ, ボタン, バラ, キクと次々に園芸にこっていったため, 当時郊外だった豊中村 (現在は市) へ転居した。博士は幼い時から自然に親しめた。その自然的, 家庭的環境から, 彼がナチュラリストとなり, また本草学史, 博物学史に興味をもつようになったことが理解される。

大阪薬学専門学校を卒業した博士は川村多実二著『日本淡水生物学』2巻 (1918) を読んで, この学問にあこがれ大正12年京都大学動物学科に入学し, 川村博士のもとにミジンコ類を研究, 卒業論文は「日本淡水産鰓脚類」だった。京都大学の助手となって教室の図書掛をつとめ, 昭和4年に講師となり, 理学部付属となった天津臨湖実験所に勤め, 川村多実二所長のもとに所員として研究を続け, 後に自ら所長となった。京都大学の教養部の生物学の教授をつとめ, 昭和38年 (1963) 停年退職し, 京都大学名誉教授となった。

上野博士に『陸水生物学概論』(1935),『淡水生物学』(1960),『川村日本淡水生物学』(編, 1973)の他に『陸水学史』培風館, 1977, A5, 367 pp., ¥3,600 がある。世界のくわしい陸水学の歴史で参考文献は622件に及んでいる。

博士は助手時代に読んだオズボーン著『大博物学者の印象』を読んで興味を持ち本草学史, 日本博物学史を本業とあわせて勉強, 関係古書も集めた。停年後は重点を博物学史に移して研究, 昭和39年から55年まで甲南女子大学教授として生物学ならびに科学史を講じた。

幸い到大阪には本草書を集積した武田長兵衛商店(昭和18年来, 武田薬品工業)の社長の杏雨書屋があり, 博士はここに大学の許可をうけて毎週火曜日に通っていた。また, 愛知県の西尾市に滞在して岩瀬文庫に通うことができた。これらによって得た成果はすでに『日本生物学の歴史』弘文堂, 1939, 新書版, 181 pp., ¥0.5, また『日本博物学史』星野書店, 1948, B6, 232 pp., ¥75 として世に出た。それまでまとまった日本生物学の通史は篠遠喜人(1895-1989)と向坂道治(1895-1979)共著の『大生物学者と生物学』(1930)でみるしかなかった。

昭和16年に帝国学士院が紀元2600年を記念して江戸時代までの日本科学史の編纂を計画し, 柴田桂太会員のもと動物学史執筆委員として江崎悌三, 上野益三, 高島春雄の三氏が委嘱された。しかし, 太平洋戦争がおきて中断, 柴田会員, 江崎委員が亡くなり, 高島委員の資料原稿は戦災によって焼失し, 事業は停止した。やがて上野委員が中心となって活動を再開し, 明治前日本科学史刊行会編纂『明治前日本生物学史』第1巻 日本学術振興会, 1960, A5, 674 pp., ¥1,300 が刊行された。第1巻は動物学史であるが, 本草学は一般に動・植・鉱物を同時に研究しているから, 本書はもっともくわしい生物学史といってよく, 植物学史にも役立つ。著者は上野博士で, ただ第14章「日本に於ける動物学の変遷」のみ高島春雄氏の執筆による。これにつづいて第2巻(1963) 619 pp., ¥1,800 は新たに委員となった湯浅明博士により, 植物学史を扱っているが, ほとんど年表, 年譜, 図書表に終始している。上野博士は『明治前日本生物学史』第1巻の自己の記事を改訂して, 上野益三『日本動物学史』八坂書房, 1987, A5, 531 pp., ¥13,000 としたが, 著者によれば「今回の改訂に当っては蕪雑な文辞を改め, 冗文を削り, 1960年の初版当時は必要と考えた近世の本草学史的部分の多くを除き, そのあとを動物学の記事で補足した」という。

上野博士は日本生物学史を著述したのみならず, 多くの人々の日本生物学史研究を推進した。研究に大いに役立ったものは, 上野益三『日本博物学史』平凡社, 1973, 680 pp., 索引 73 pp., ¥4,800 である。これは第1部は「日本博物学史通史」で第2部は「新撰詳注日本博物学年表」である。また両者の間に17図版にわたり68人の本草家の墓の写真がある。従来の日本生物学史研究学者は白井光太郎『日本博物学史年表』を用いてきた。この初版は1891年, 増訂本は1908年, 改訂増補版は1934年, その第2刷は1941年に

出た。改訂は矢野宗幹<sup>むねもと</sup> (1884-1970) による。矢野氏は白井博士の書きこみを参考に改訂増補したが、さらに改訂増補する意図があったので上野博士による改訂増補の申しこみを断った。そのため上野博士は断念し、自己の「日本博物学史」の年表を発表した(上野博士の談話による)。本書は好評で第2刷もでたがそれも売切れたので、本書の第1部と第2部とを分けて、上野益三『日本博物学史』講談社学術文庫、1989, A6, 282 pp., ¥780 と、上野益三『年表日本博物学史』八坂書房、1989, A5, 470 pp., 索引 68 pp., ¥8,030 との二書として出版されている。これによって博士の代表的な日本博物学通史は文庫本として一般大衆に広く読まれることになり、一方において年表はすっきりとした形で使用しやすくなった。両書とも初版の記事は訂正増補されていて、今となっては決定版となった。

上野博士は全国を旅して写真器をさげて本草学者の跡を尋ね、それは後にまとめられ、上野益三『博物学史散歩』八坂書房、1978, A5, 276 pp., 索引 9 pp., ¥4,500 となった。これとは別に上野益三『薩摩博物学史』島津出版会、1982, A5, 317 pp., 年表 11 pp., ¥3,500 がある。これは島津出版会の要請によってできるだけあって多くの色刷の口絵や多数の挿絵によって思う存分に記述されている。薩摩は日本本土の最南端に位置し動植物は豊富、しかも歴代の藩主が多くの本草学者を起用して本草や物産に力を注いだので、関連文献も多く内容は豊富である。

上野博士の論文を集成したものに『博物学史論集』八坂書房、1984, A5, 599 pp., 索引 32 pp., ¥15,000 がある。なお、雑誌などに書かれた博物学史関係の記事を集めて、次の三冊の著作があいついで出版された。

上野益三『草を手にした肖像画』八坂書房、1986, B6, 300 pp., ¥2,800

上野益三『忘れられた博物学』八坂書房、1987, B6, 277 pp., ¥2,800

上野益三『博物学の愉しみ』八坂書房、1989, B6, 327 pp., ¥3,000

思えば筆者が上野博士にお会いしたのは喜寿の御祝にささやかな感謝の宴を開いた時と、米寿の御祝いのにぎやかな各方面の方の盛大な会に出席したこと、また甲南女子大学に博士の旧蔵書を拝見に伺った際の三度である。

しかし博士の著書を通じて受けた学恩を思い、ここに一文を草した。なお、博士の最近の風貌に接したい方は次の河合雅雄博士との博士の対談の写真、記事を見られたい。「楽しみながらやればいい」『アニマ』創刊 200号記念特大号(1989, 5月) 12-17ページ。

(木村陽二郎 Yojiro KIMURA)